

## 北原牧地区遺跡

(くらぞの 藏園遺跡 · うえぞの 上園遺跡 · 東牧遺跡)

県営農村基盤総合パイロット事業（尾鈴二期地区  
北原牧工区）に伴う埋藏文化財発掘調査概要報告



藏園A-7号墳

1988・3

宮崎県新富町教育委員会

## 序

新富町教育委員会は、県営農村基盤総合パイロット事業北原牧工区の事業に伴い、宮崎県の委託を受け、事業地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその概要報告です。

本調査の中、昨年に引き続き古墳時代中期の本格的な集落跡が出現し、県下でも数少ない古墳時代の生活跡として貴重な調査となりました。また、藏園C遺跡においては、地下式横穴墓の北限地に新たに一基を加え、本墓制の北限地についての地歩を固める調査となりました。

調査は、宮崎県教育委員会文化課、県立総合博物館の御協力によって行ったものです。

また、発掘調査に際しましては、県一ヶ瀬土地改良事業所及び一ヶ瀬土地改良区にあわせ、地主及び耕作者をはじめとする地元の方々の御理解と御協力をいただき心から御礼申し上げます。

昭和63年3月

新富町教育委員会

教育長 小田幸一

## 例　　言

1. 本書は、北原牧地区の県営農村基盤総合パイロット事業に伴い、昭和62年度に実施した北原牧地区遺跡（上薦・藏園・東牧）の発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は、新富町教育委員会が主体となり、県文化課主任主事長津宗重氏・県立総合博物館谷口武範氏・町教委、有田が調査を担当した。
3. 本書に使用した図の作成及び製図は、長津・有田があたった。
4. 本図に使用した方位は真北を使用した。磁北については注記を行った。
5. 本書の執筆、編集は有田・長津・谷口が、各々分担した。

## 目　　次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 遺跡の概要	3
○上薦遺跡	
○東牧遺跡　○藏園第Ⅰ遺跡　○北原牧遺跡	
○藏園遺跡(A・B)	
IV まとめ	15

## I 調査に至る経緯

昭和62年度において、新富町大字日置・三納代にまたがる北原牧台地において、県営農地基盤整備事業が進められた。事業地内の埋蔵文化財の調査は、昭和56年に実施した遺跡詳細分布調査の際、上菌遺跡・西牧遺跡・藏園遺跡・北原牧遺跡等が確認され、同年、藏園地下式横穴墓が確認されていた。事業に併せて、昭和61年度に実施した事前発掘及び確認調査において、上菌遺跡においては、古墳時代の集落が検出されている。

新富町教委、宮崎県教委文化課、県一つ瀬土地改良事業所と事業地内に存在する埋蔵文化財について協議した結果、現存する富田古墳群の保護について、古墳の周溝を含めて周囲の削平を行わず、ほぼ現状のままとし、上菌遺跡についても極力削平を受けない形で盛り土等、保存に留意することとなり、事業施行上、現状保存が困難な部分においては、止むなく記録保存の措置をとることになった。調査は、新富町教育委員会が主体となり、県教委文化課長津宗重氏、谷口武範氏を調査員として、他に北郷泰道、近藤恵、菅付和樹氏に応援を頼んだ。本調査では、古墳時代住居跡において富山大学理学部広岡公夫氏に、特に依頼し地磁気の測定も実施した。



## II 遺跡の立地の環境

新富町は、宮崎市の北約 20 km にあり、西に西都市、北に高鍋町、南に一つ瀬川を挟み佐土原町に接し、東側を日向灘に臨む。その町域は一つ瀬川北岸の沖積平野と洪積台地に占められている。この洪積台地は、広く宮崎平野に広がるもので平坦面の顕著な段丘地形となっている。

北原牧地区遺跡は、新富町大字三納代・日置にまたがる通称北原牧に所在し、北に日置川に開析された日置谷と南に鬼付女川に大きく開析された三納代谷に挟まれた標高約 70m の台地に立地する。北原牧台地には、今回調査が行われた東牧・上蘿・藏園（A、B、C）の各遺跡があり、この中大きく県指定富田古墳群に含まれると考えられる藏園 A、B、C・北原牧の各支群が点在している。北原牧地区遺跡のある台地周辺には、北東約 700 m の日置川対岸の台地上に古墳時代後期の小集落である藤掛遺跡があり、住居跡と溝状構造が検出されている。またこの台地の東南端にあたる鎧丘陵には、昭和 56 年調査された鎧遺跡があり、弥生時代中期の住居址 6 軒が確認されており、葺石を二条めぐらした鎧古墳は、5 世紀前半に比定されている。この丘陵に続く海浜性沖積平野には、弥生時代～古墳時代の住居址が確認され、弥生時代前期の今別府遺跡もこの砂丘上にのっているものと思われる。また、この台地南側の鬼付女右岸の河岸段丘には、弥生時代終末期と考えられる奥遺跡があり、新富町における埋蔵文化財の密集地となっている。

### III 遺跡の概要

## 上園遺跡 E 区

### 1 調査区の概要

E 区は東西 100m、南北 25m の東西に長い調査区で、3,000 m<sup>2</sup> の発掘調査を行なった。検出された遺構は、古墳時代後期の竪穴住居 74軒 奈良時代のカマド付竪穴住居 1 軒 平安時代の竪穴住居 3 軒・掘立柱建物 2 棟・中世の溝状遺構 6 本・石積遺構 1 基・土壙 1 基などである。出土した遺物としては弥生時代後期初頭の勾玉状浮文を付けた壺形土器・古墳時代の須恵器・土師器・鉄器(鐵鏃・刀子・鎌・鎌先など)・石製品(子持勾玉・勾玉・管玉・紡錘車など)奈良時代の須恵器(墨書き土器)・土師器・平安時代の須恵器・土師器・布痕土器などがある。

### 2 古墳時代の遺構と遺物

#### 竪穴住居

古墳時代の竪穴住居は 74 軒すべて方形プランで、西側の部分に切り合いが非常に多い。主柱穴はほとんど 4 本柱で、一部 6 本・8 本柱があり、壁帶構を有するものもある。45 号住居 871 cm × 833 cm の 725 m<sup>2</sup>、33 号住居が 825 cm × 776 cm の 640 m<sup>2</sup> と床面積の規模が大きい。床面積は 10 m<sup>2</sup> 未満 3 軒、10~20 m<sup>2</sup> 17 軒、20~30 m<sup>2</sup> 19 軒、30~40 m<sup>2</sup> 12 軒、40~50 m<sup>2</sup> 8 軒、50~60 m<sup>2</sup> 3 軒、60~70 m<sup>2</sup> 2 軒、70~80 m<sup>2</sup> 1 軒である。平均的な住居は一辺 5 m 程度の 25 軒である。4 本柱で開まれた中央部にはよく踏みしまった硬化面と焼土面がある。また住居の中央部に甕が入るだけの穴を掘り、そこに土師器の甕を口縁部だけを床面より上に出して据え付けた従来「埋甕」と呼ばれているものが 10 軒の住居から検出された。甕を据付けた穴の壁は固く焼き締まっており、甕の口縁部の周辺には焼土塊が巡っている。須恵器を有しない 27 号住居と須恵器Ⅲ期の 30 号の住居は、須恵器ⅢB 期の 28 号住居によって切られている。(第 2 図)。また 68 号住居(須恵器Ⅰ期・焼土面)→49 号住居(須恵器ⅢA 期・焼土面)→34 号住居(須恵器ⅢB 期・埋甕)→70 号住居(奈良時代後半・カマド)と遺構・炉の変遷が追える。

#### 須恵器

2 号住居からは取手を有する底部穿孔(多孔)の土師器の瓶と伴にⅠ期に比定される須恵器の短脚一段透しの有蓋高杯・甕・無蓋高杯が出土している。8 号住居の N 区(南西区)の床面からはⅠ期に比定される須恵器瓶身が出土している。30 号住居のⅢ区(南東区)の壁際から出土した須恵器瓶身は子持勾玉・圭頭鏡を伴なっている。

1 号は 2 号出土の有蓋高杯で、杯部の口縁部が斜め上方に若干直立気味に立ち上がり、口唇部は明瞭な凹である。長方形三方透しの短脚の脚端部はあまり鋭くなく、丸味を有する。

第1表

## 上園遺跡E地区堅穴式住居観察表

住居番号	規 模 cm	面 積 m <sup>2</sup>	主柱穴	周 溝	鉄 器	遺 物	そ の 他
SA 1	580×415+α	(33.6)		○	鉄器	管玉	
2	575×577	43.7	4	○	刀子	懸	
3	400×181	7.2					
4	667×636	42.4	9	○	鉄鎌		
5	529×518	27.4	4				
7	504×435+α	(25.4)	4				
8	624×534	33.3	4		刀子	管玉	
9	630×150+α	(39.7)	4				
10	620×230+α	(38.4)	2+α				
11	561×528	29.6	4				
12	584×390	22.8	4				
14	566×504	28.5	4		鉄鎌		
15	550×496	27.3	4				
16	597×477+α	(35.6)					
20	725×710	51.5	4		鉄器		
21	469×449	21.1	4		鉄器		埋甕
22	310×310	(9.6)			刀子		
23	372×332	12.4					
24	465×464	21.6	4				
25	346×304	10.5			鉄器		
26	617×609	37.6	4	○	鉄鎌・刀子	管玉・紡錘車(滑石)	
27	540×368+α	(29.2)	4		鎌		
28	775×715	55.4	4				
30	607×550	33.4	4		鉄鎌	子持勾玉	
32	335×344+α	(11.9)			鉄器		
33	825×776	64.0	4		刀子・鎌・鋸先	滑石片	
34	500×490	24.5	4				埋甕
35	313×297	9.3	4				
36	547×387+α		4				
37	452×383	17.3	4		鉄器		
38	560×550	30.8	4	○	刀子・鉄器		
40	662×637	42.2	4	○	鉄器		
41	636×224+α	(40.4)	2+α	○	刀子	紡錘車(滑石・線刻)	
42	441×370+α	(19.4)	4				
43	634×634	(40.2)	4	○			カマド

住居番号	規 模 cm	面積 m <sup>2</sup>	主柱穴	周 溝	鉄 器	遺 物	そ の 他
SA 44	333×299	10.0					
45	871×833	72.5	8		刀子・鉄器		
46	526×526	(27.7)			刀子		
47	743×688+α	(55.2)	8	○	鍔先		
48	801×770	61.7			鉄器・鉄さい		
49	670×650	43.6			鉄器		
51					鉄器		埋甕
52	308×289	8.9	3+α				カマド
53	442×412	18.3	4	○			
55	398+α×390	(15.2)	2+α		鉄鎌・鉄さい		
56	558×388	21.7					
57	636×581	37.0	4	○	鉄鎌		
58	549×486	26.7	4		鉄鎌・鉄器		埋甕
59	390×366+α	(15.2)					
60	560×372+α	(31.4)					
61	351×292	10.2			刀子		
62	310×301	9.3					カマド
65							埋甕
66	440×430	18.9	4	○	刀子・鎌・鉄器		カマド
67	657×521	34.2	4	○			
68	385+α×265+α	(10.2)					
69					鉄器		
70	325+α×255+α	(8.3)				墨書土器	カマド
71	716×645	46.2	8				埋甕
72	693×452+α	(48.0)	6				
73	785×656	51.5	8				
74	571×535	30.5	4				
75	367×467+α	(13.5)	4		鉄器		
76	597×576	34.4	4				
77	395×340	13.4					
78	400+α×250+α	(16.0)					
79	199+α×161+α	(4.0)					
85					鎌・鉄鎌		
86					鉄器	菅玉 2	
87	435×390	17.0				勾玉 1・玉	
88	350	(12.3)					埋甕
89	465+α×290+α	(21.6)					埋甕

杯部下半部にはヘラ削りを施し、その他の部位はヨコナデである。脚部内面は特に強いヨコナデを施している。口径11.6cm、立ち上がり高1.7cm、器高10.0cm、脚部径9.0cm。

2は8号住居出土の杯身で、口縁部は直立気味に斜め上方に立ち上がり、口唇部は明瞭な凹である。杯部はほとんどヘラ削りを行っており、他の部位はヨコナデを行ない、底部内面は仕上げナデを施す。口径10.6cm、受部径12.7cm、器高5.0cm。

3は30号住居出土の杯身で、口縁部は斜め上方に伸び、途中で直立気味に立ち上がる。口唇部は平坦である。杯部下半部にはヘラ削りを施し、他の部位はヨコナデを、底部内面には仕上げナデを施す。底部には平行な二本沈線のヘラ記号を有する。口径10.2cm、受部径12.2cm、器5.0cm。

#### 石 製 品

7は30号住居のⅡ区(北東区)の床面出土で、退化し扁平化したタツノオトシゴ状の子持勾玉である。滑石系の石材を使用し、両側穿孔である。長さ44cm、幅27cm、厚さ0.4cm。

8は41号住居のⅢ区(南東区)出土で、表裏とも三角文(内側は格子状)の線刻を施した滑石製の紡錘車である。直径39cm、高さ14cm。26号住居からも文様のない石製紡錘車が出土している。

#### 3 奈良時代の遺構と遺物

##### 堅 穴 住 居

奈良時代の堅穴住居は70号住居1軒だけであり、一辺 $3.25 + \alpha$ mの床面積約10m<sup>2</sup>の小型の住居で北辺の中央部にカマドを有している。Ⅱ区(北東区)の北車廻の宋面から斜位の状態で須恵器の高台付甕が出土し、8世紀後半に比定される。

##### 須 恵 器

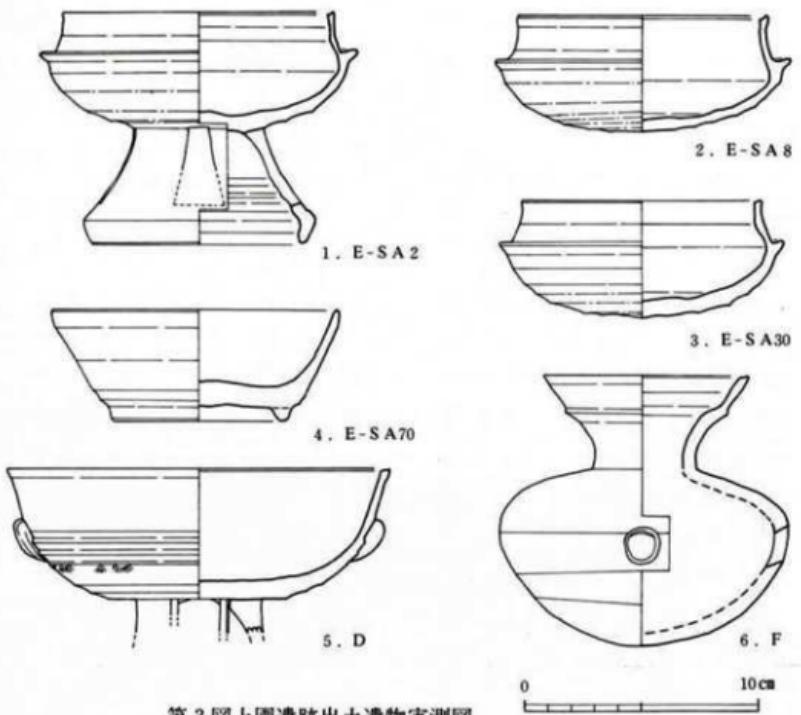
4は70号住居出土で、口縁部は斜め上方に伸び、口唇部は丸味を有する。高台は短く斜め下方に伸び、厚手である。杯部と高台の接合部の外表面は強いヨコナデを施し、他の部位はヨコナデである。高台の内側に「五」の文字の墨書きがある。口径12.3cm、器高4.8cm、底径7.4cm。

##### 小 結

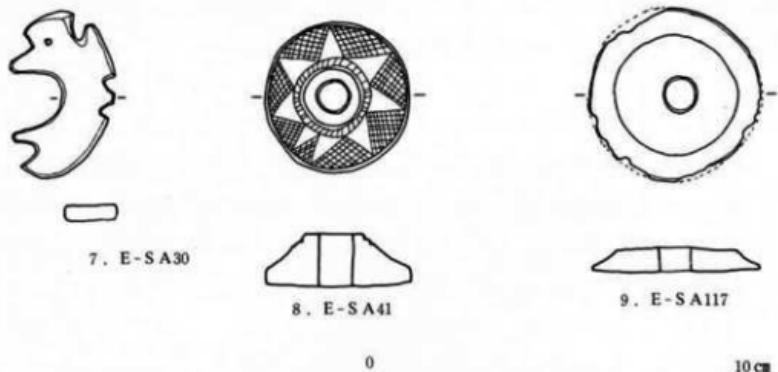
E区は中央部の北側から西側にかけて堅穴住居はかなり切り合っており、当集落の中心の一つとして頻繁に建て替えが行なわれている。時期的には須恵器以前の段階、須恵器Ⅰ期、同Ⅱ期、同ⅢA・B期、同ⅣA・B期と住居の数に変動が見られる。26号住居、33号住居などの大型住居から鉄器、玉類・滑石製石製品が特に出土しており、E区では玉類を56%、鉄器を352%の住居が保有している。須恵器のⅠ・Ⅱ期には炉として住居内に焼土面が形成さ



第2図  
E K S A 27-28-30 速構図



第3図上園遺跡出土遺物実測図



第4図上園遺跡出土遺物実測図

れるが、須恵器のⅢ A期になると「埋甕」が住居の中央部に据付けられ、炉としての形態の変化が窺える。古墳時代のカマドは当遺跡内ではなく、70号住居のように奈良時代後半まで待たなければならない。

#### 注

- (1) 「埋甕」について機能をふまえて名称について検討する必要がある。
- (2) 長律宗重 「宮崎平野の須恵器編年案」『市ノ瀬地下式横穴墓群』1986

### D 区

#### 1 調査区の概要

D区は東西50m、南北80mの南北に長い調査区で、4000m<sup>2</sup>の発掘調査を行なった。検出された遺構は、古墳時代後期の竪穴住居95軒・土壙1基、奈良時代のカマド付竪穴住居3軒、平安時代の掘立柱建物3棟・土壙墓2基、中世の溝状遺構6本などである。出土した遺物としては古墳時代の須恵器・土師器・鉄器（鉄鎌・刀子・紡錘車など）・石製品（勾玉・ガラス小玉など）、奈良時代の須恵器・土師器（墨書き土器）、平安時代の須恵器・土師器・白磁などがある。

#### 2 古墳時代の遺構と遺物

##### 竪穴住居

古墳時代の竪穴住居は95軒すべて方形プランで、北側の部分が切り合いが非常に多い。主柱穴はE区と同様に4本柱であるが、E区よりも壁帶溝を有するものは少ない。「埋甕」は14軒の住居が有している。66号住居は床面全面に1個体分の大甕の破片が散乱して出土しており、特異なあり方を示している。また109号住居は土器捨て場のような状況で大量の土器が出土しており、貝・支脚・須恵器杯（NA期）も出土している。

##### 須 恵 器

5は表土剥ぎの際にW-29で出土した両耳付無蓋高杯で、杯部の口縁部は斜め上方に伸び、口唇部は平坦である。杯部の中央部に二条の突帯を有し、その上に耳を張り付けているが、輪状にはなっていない。両耳の下位に不明瞭な退化した櫛描波状文を施している。脚部は欠如しているが、長方形の三方透しである。杯部内外面とも自然釉がかかっており、調整は不明であるがヨコナデが多い。口径16.4cm、杯部高5.0cm。

##### 石 製 品

当地区では石製紡錘車は60号住居と117号住居で出土している。

9は117号住居のⅢ区（南東区）出土で、無文の扁平な滑石製紡錘車である。直径4.5cm、

厚さ 0.65 cm。

### 3 平安時代の遺構と遺物

D区の北側で平安時代の土壙墓が2基、それぞれ単独で検出されている。

1号土壙墓は117号住居の埋土を掘り込んで作られた土壙墓で、直径8.4cm、縁厚0.25cmの松鶴文鏡と直径25cm、厚さ0.1cmの北宋の皇宋通宝(1039年)を副葬していた。これに共伴する土師器は、口径14.2cm・底径7.5cm・器高2.8cmの板目の皿1枚と、口径9.0cm・底径7.1cm・器高1.7cmの糸切りの小皿1枚、口径8.7~9.4cm・底径6.5~7.1cm・器高1.6cmのヘラ切りの小皿3枚である。副葬品のセット関係から平安時代末~鎌倉時代初頭に比定される。

2号土壙墓は92号住居の埋土を掘り込んで作られた土壙墓で、直径11.4cm、縁厚0.2cmの湖州六花鏡と鉄鎌を副葬していた。これに共伴する土師器は口径8.8~9.1cm・底径7.5~7.7cm・器高1.6~1.7cmのヘラ切の小皿3枚と、口径13.8cm・底径8.0cm・器高2.8cmの板目の皿1枚である。副葬品のセット関係から平安時代末に比定される。

## F 区

### 1 調査区の概要

F地区は上層遺跡の立地する丘陵の西端にあたり標高約72mで、E地区の西に位置する。検出した遺構は、住居跡22軒（6軒は未掘）、溝状遺構18条、土壙2基、掘立柱建物跡8棟である。北側や丘陵縁部は表土除去後、すぐにアカホヤ層下の褐色土が露出し遺構の残りもあまり良くなかった。逆に東、南部はアカホヤ上層の黒色土が厚く遺構検出に時間を費やした。

### 2 調査区の遺構

住居の切り合いはE地区くべると少なく、すべて方形である。住居の規模はSA15が約8m×8.5mと最大で、SA14が4.8m×3.5mと最小で、平均的には5~6mの規模のものが多い。主柱穴はすべて4本柱である。時期は須恵器を伴わない5世紀代（SA5・10）、五世紀後半～末（SA16）、六世紀後半（SA4・13・15・18）に比定できるものとに分けられる。さらに、住居のほぼ中央には焼土がみられ、掘り込みをもつものと持たないものそして埋甕が設置されるものとに分けられるが、これは時期差として捉えることができるようである。SA2は西壁に短く伸びた煙道を有するカマド付き住居跡で、平安期と考えられる。

溝状遺構は丘陵縁辺という立地条件に起因するためか、E地区に比べ非常に多く検出された。遺構のほとんどは丘陵縁辺に沿うような形で弧状に南北へ伸びている。東西に伸びるものは検出面からの深さが浅く、これは前者に比べもともとの遺構の深さの違いが想定される。SE13は検出面から約1mと深く、底はV字状を呈す。北側部分については最後まで確認していないが、そのまま丘陵端まで延びそこで切れている可能性が大きい。その他の溝状遺構は30~40cmの深さで底は箱掘りである。古墳時代の可能性のあるものは、SE15・18・19・25で、これらの溝状遺構からは土師器や六世紀後半～末期の須恵器がまとまった状態で出土している。特に、SE15・18・19は上層断面に切り合い関係はみられず同時期のものとして考えられ、住居群との関係が今後の課題といえる。

掘立柱建物跡は古墳時代のものとして認定できるものはなかった。建物跡5間×3間と大型で、柱穴も大きさや深さなどから他の柱穴とは容易に識別できた。建物を形造る柱穴から遺物はほとんど出土していないが、E地区やD地区の出土状況や他の柱穴から糸切り底の小皿がいくつか出土していることからそれらに近い時期（12~13世紀）と考えられる。

### 東牧A遺跡

この遺跡は、上齋遺跡の北西約500mにあり、北側は日置谷が大きく西に切れ込み、南側には、日置谷の一支谷により、上齋遺跡と対峙する標高72mの台地中央部に立地する。遺構は、弥生時代後期と考えられる方形の住居址1軒のみで、東西7.4m、南北5.4mで壁側に巾約1.2m、床面より約15cm高いベッド状の段を有し、主柱は東西に2本、南側には、入口と思われる掘り込みが外に付き出していた。入口に近い部分には、梢円形の土壇があり、東側肩に35×12cm大の砂岩がすえられ、埋土から、頁岩の細片が多数出土している。遺物は、丁字突帯を持つ中型甕と逆L字状を呈する大型甕が、各々1個体、他に刻み突帯をもつ甕片、甕頸部、頁岩製磨製石器1点が出土している。

### 蔵園第II遺跡

この遺跡は、蔵園遺跡(B群)より、約650m南に延びた台地の先端部にあり、標高約65mに立地する。なお、南西300mの沖積平野には、弥生時代終末と考えられる箱式木棺墓1基、土壙墓8基、古墳時代の住居址1軒、地下式横穴墓1基が検出された。

地下式横穴墓は、この台地でこれまで発見された2基が遺物を伴ってなかったのに対し、須恵器蓋付杯3セット、耳環2、刀子1が出土している。竪穴部は当初、方形の住居址との想定で発掘したが、埋土の関係から地下式横穴墓の可能性が強まり、地層の乱れた北側部分に玄室が検出された。天井部は落ちていて、内部には埋土が詰まった状態であった。竪穴は比較的大型で、掘り込みは長方形の南北3.2m、東西2.4m、深さ0.9m、玄室は奥行0.6m、巾2.1mの平入式である。玄室には、径5～10cmの円礫が全面に敷かれ、死床は2体分確認されている。須恵器は、Ⅲ期に相当するものと考えられる。

## 北原牧遺跡

本遺跡は、北原牧台地に墳丘の残る未指定の円墳群で、本年度発見調査した4号墳を併せて計4基となった。1～3号は墳丘をそのまま保存することになり、1号墳については墳丘測量と周溝の確認を行った結果、北原牧台地に所在する円墳群の中、最大の円墳で、直径約34mの外に二重の周溝（内側巾約3.5m、深さ約1.5～1.8m、外側巾約2.5m、深さ約20～30cm）とその間に巾約3.5mの周堤をもち、ほぼ真南に陸橋をもつ円墳が検出された。墳丘の観察から、ほぼ中心部にあたる部分に盗掘と思われる窪みが確認された。周溝埋土からは須恵器高环、坏蓋、大妻片、短頸壺など多数の出土をみている。

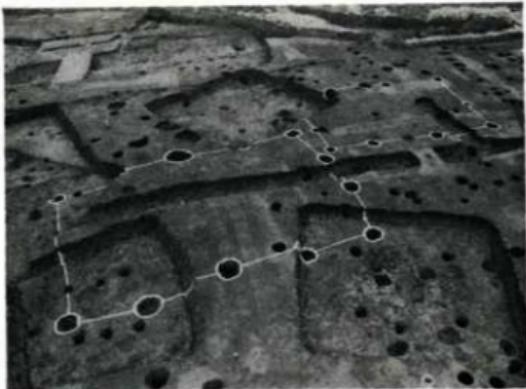
## 蔵園（A・B）遺跡

本遺跡は、上薦遺跡からほぼ西に500mにあり、間に2～3mの谷を隔てた北原牧台地でも高位面（標高71～74m）に立地しており、中には県指定富田古墳2～6号が所在する。蔵園地下式横穴墓と墳丘の残る指定4・6号を中心とした部分は、群構成の把握からB群とし、僅かに開析された谷を隔てた北側の高位面の部分をA群とした。A群からは、2～9号墳まで計8基が検出された。この中6号墳は南北16m、東西14mの方墳で、7号墳は径19.5mで二重の周溝（内側巾約3.1m、深さ0.85m、外側巾約1.4m、深さ約0.8m）と間の巾約1.5mの周堤をもつ。その他は、一重の周溝の円墳で、全て主体部は削平を受けていた。B群からは、二重周溝の2号、一重の周溝3基の計4基が検出されている。なお、南東側に所在する富田古墳指定6号墳も県教委の試掘により、二重周溝が確認されており、外側周溝部分で推定約13.5mを測る。二重周溝をもつ円墳は、県内では初例であり、A・B群・北原牧遺跡1号墳あわせて4基となる。これらは、西都原鬼の窟古墳の姿が想起される。

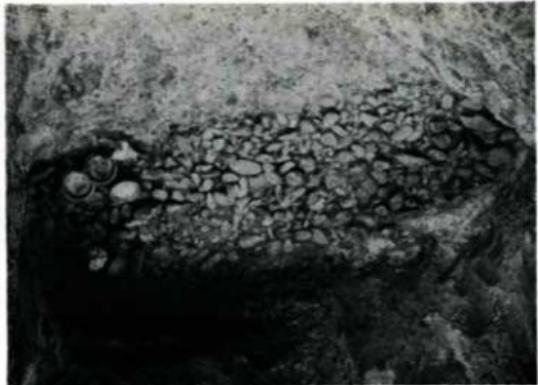
## IV まとめ

上薗遺跡D区は、北側で竪穴住居がかなり切り合っており、E区とは別の中心の1つと頻繁に建て替えが行なわれている。D区とE区の間及びF区は住居が疎になっており、集落内でのグルーピングが可能である。須恵器を出土した竪穴住居は、Ⅰ期が2軒、Ⅱ期が13軒、ⅢA期が6軒、ⅢB期が5軒、ⅣA期が5軒、ⅤB期が1軒であり、Ⅱ期～Ⅲ期にピークがある。D区はE区と同様にかなり鐵器は出土しているが、玉類は少なく142号住居でガラス小玉が出土しているのみである。須恵器以前の時期の2号土墳からは、大小の勾玉2個出土している。古墳時代の鉄製紡錘車及び支脚は県内では初例であり、注目される。平安時代末～鎌倉時代初頭の土塙墓が2基検出されたことは、鏡の出土とともに当時代の墓制を知る上で貴重である。

D・E・F区全体で約200軒の竪穴住居を調査した結果、上薗遺跡はある程度面的な発掘調査が行なわれ、今後の整理によって古墳時代の集落の規模・範囲・構造が解明され、また竪穴住居の切り合いにより、土師器・須恵器の土器編年が細分化され、集落の盛衰が追究できるものと思われる。また、当集落の墓地である富田古墳群・北原牧古墳群・鎧古墳群・藏園古墳群には、前方後円墳は確認されていないが、円墳・横穴墓・地下式横穴墓という3種類の墓制が共存しており、円墳群の主体部については不明であるが、集落と墓地の関係をある程度解明できると思われる。



上商遺跡F區



藏圓C-1 地下式橫穴墓



藏圓B-3號墳(2重周溝)



東牧遺跡1號住居